



御親の記憶は儂くも  
…ただ逢いたくて。  
南海部 覚悟

京都府警本部、5階の刑事部長室に玲子と笑子のカップルが呼び出されています。眼下の“下立売通”を行き来する人々の吐く息から、白いものが見えなくなって半月程たった、朝のことです。



「君たちに、ある人物の密着警護を頼みたい。日系スイス人の女性数学者だ。」  
そう言いながら、刑事部長の永山が一枚のポートレートを二人に差し出します。

「——あれ？これ先輩じゃないですか！何処で撮ったんですか？」

永山の手から写真を引っ手繰るようにして、笑子が甲高い声を上げます。

「ほんと！私そっくりね、何だか気持ち悪いけど……。」

「先輩じゃないんですか……この人？」

「私も、その写真を見せられた時、正直驚いて大声を挙げた。白河だけじゃなくて黒木にも双子の姉妹が居たのかってな……。でも、完全な他人のそら似だ、本人は日系の3世で、資産家の両親とともにスイスのジュネーブに住んでいる、**ICAN**（核兵器廃絶国際キャンペーン）の有力な活動家だ。」

笑子からポートレートを受け取りながら、永山が続けます。

「今日広島でICANの主宰する集会に出席した後、明日から尾道・京都を廻って、3日後関西空港から帰国する。君たちには広島から離日するまでの全行程を警護してほしい。」

「で、その学者さんを警護する理由は？」

当然の玲子の質問に、永山は目の前のブラインドスラットを押し下げながら、「5年前にスイスのプライベートバンクの顧客情報が、ネット上に漏洩した事件があったろ？」

「バーゼルの国際決済銀行（BIS）のシステムが攻撃を受けた、あの件ですか？」

「——そう、それだ。一時は匿名口座の名義人の素性が開示されるんじゃないかと、大騒ぎになったが……。」

「確か、口座ごとのファイルに特殊なロックが掛けてあって、結局口座を管理するプライベートバンカー（個人銀行家）にしか、漏洩したファイルが入った圧縮ホルダーを開けないことが分かって、事無きを得たんでしたわね。」

「何万とある匿名口座ごとに、別々のファイルロックが掛かっている、更に全ての口座

のナンバーズアカウントが揃わないと、圧縮ホルダー自体解凍が出来ない仕組みになっていたから、世界中の資産家が胸を撫で下ろしたわけだ。」

「で、その女性数学者が・・・？」

笑子が相槌を入れます。

「しかしまあ、スイスに匿名口座を開設した資産家とすれば、やっぱり心配なわけだ、漏洩した圧縮ホルダーは、世界中のオンラインストレージや端末ストレージにそのまま残っていた訳だからな。何れホルダーを解凍させて、全ての口座のファイルロックを一斉に開錠させるプログラムが、開発されるかも知れん……。そこで、この圧縮ホルダーを特定して、ネット上全てのストレージから自動的に消し去る（物理フォーマット）為のプログラムが、開発された。それを作ったのが、この先生だ。」

「プログラムを作るにあたって、全てのプライベートバンカーから、顧客口座全てのナンバーズアカウントを収集した。ナンバーズアカウントは、匿名口座のファイルロックを開錠することは出来ないが、ホルダーを解凍出来るか否かによって、処理すべきホルダーを特定することが出来る。解凍と同時に物理フォーマットを掛ける仕組みだった。」

「世界中のリベラル系メディア関係者の反対を押し切って、実行されたんでしたわね、そのプログラム……。」

「問題となっているのは、全てのナンバーズアカウントを統合したマスターアカウントを、この先生が持ってるんじゃないかってことだ。」

「——と云うと？」

また笑子が相槌を打ちます。

「匿名口座のファイルロックはナンバーズアカウントを基にして設定されることが多い、全てを統合したマスターアカウントが存在すれば、全ファイルロック共通の、開錠プログラムが簡単に作成できる……。」

「でも、漏洩した圧縮ホルダーはネット上から全て削除されたんでしょ？」

永山の口元が、にやりと緩んで二人の顔を見上げます。

「スタンドアロンの端末ストレージ。USBメモリーでもいい、ネットに接続されていないストレージの中に圧縮ホルダーが残っていれば、それは削除されない……。」

「じゃ、そのマスターアカウントを取得・確保したい勢力と、永遠に抹消したい勢力との相剋が、女性数学者を巡って存在する訳ですね。」

「——分かっていると思うが、警護対象者への襲撃や拉致を想定すると、特に黒木にとって危険な任務となる。二人とも武器の所持を許可する。」

窓の外の電線に屯していた椋鳥の一団が、鋭い羽音を残して一斉に飛び立ちました。



「―――あら、日本政府は大袈裟なVIP警備の代わりに、私の影武者を準備してくれた訳？流石クールよね！」

原爆ドーム近くのホテルから出てきた女性数学者は、玲子を見つけるなり長い髪を爽やかにかき上げながら、流暢な日本語で明るく声を掛けてきました。

「蓉子・シャルロット・バルマーよ、宜しくね。」

「黒木玲子です、こちら同僚の白河笑子、二人とも京都府警の刑事です。関西空港まで警護させていただきます。私たち以外に4名の広島県警の警官が、京都駅まで同行いたします。」

「―――あの4人？昨日会場を警護してた警察官とは違うようだけど、みんな若くてイケメン？じゃない！」

相生橋から吹き降ろす乾いた川風が、この冬の冷気の名残となって、3人の火照った肌を静めます。

原爆ドームを見通す歩道から、待たせてあったタクシーに乗り込むと、一路広島駅に向かいます。

「尾道にはどんなご用件で？」

「お墓参り・・・私の先祖は尾道出身なの。去年亡くなったお爺ちゃんとお婆ちゃんの遺言で、生まれ故郷の墓に入れて欲しいって・・・分骨して持ってきたのよ。両親も同行する予定だったんだけど、直前に父が体調崩しちゃって・・・小さな骨壺なのに成田空港のCIQが大変だった、人骨一本一本出して調べるのよ・・・。」

そう云いながら、バックの中から絹の布に包まれた碧いガラス製の小さな骨壺を取り出します。

表面には不思議な波模様が、繊細なフロスト加工で刻まれています。

「―――それより、私新幹線初めてなの！フランスのTGVやドイツのICEは何度も乗っているけど、今まで日本国内の移動は、ドメスティックラインと車だけだったから・・・京都は今回完全なプライベートだから、新幹線で京都に行けるなんて最高よ！」

「蓉子さん“鉄女”なんですか？」

初対面の人間が、短時間で和合出来る資質は、男性よりも女性に一日の長が在るようで、この日も3人がタクシーのシートに座して間もなく、黄色い笑い声が狭い空間を充填してしまいました。

新尾道駅で各停の“こだま”を降り、再びタクシーで菩提寺の福善寺へと向かいます。山門の長い石段を登りきると、本堂の裏に広大な墓所があって、住職の読経のもと、蓉子の祖父・祖母の納骨が、滞りなく完了しました。

眼下には嬾やかな尾道水道が、長々と横たわっています。

陽光煌めく水面に投じた玲子の視線が、落ち着きなく虚空を彷徨って、何時もの活き活きとした職務中の覇気が感じられません。

「黒木さん、何だか元気が無いわね・・・。」

「どうしたんですか先輩？タクシー降りてずっとぼんやりしてますよ？」

笑子が優しく両肩に手を添えて支えると、ハッと我に返ったように、「御免なさい！ちょっと考え事していたものだから・・・。」

「先輩らしくないですよ、何処か体調悪いんですか？」

「尾道よね・・・。」

と云いながら、再び塞ぎ込みます。

「元気出してください！時間も押しているから、先を急ぎますよ！」



福山駅から“のぞみ”に乗り込むと、玲子の憂鬱も見る見る回復して、3人の笑い声に再び花が咲きます。

グリーン車が満席で、普通車後方の3列並びに陣取った3人は、世界遺産姫路城、世界最長スパン明石海峡大橋と、車窓に現れるたび大はしゃぎです。

車内販売のワゴンが来ると、「エーッ！アルコールも買えるの、雑誌や駅弁もあるじゃない、まるでコンビニエンスワゴンよね！」

「ヨーロッパには無いんですか？」

「乗客が、車内の店舗まで買いに行くのが主流、でもスイスの山岳鉄道の一部には、ワゴンサービスがあるのよ、駅弁は無いけどね。」

と云いながら、福山駅で買った“あなごめし”の箸を進めます。

後ろの席から、広島県警の若い警官が無粋な視線を投げかけてきます。

新神戸駅を挿んだ長いトンネルを抜けると、都市高速の巨大な広告看板に並行して、間もなく新大阪です。

食事の後で3人ともウトウト微睡んできました、ロングレールの軽いジョイント音が心地良いリズムを刻みます。

ダメだ！と思って頭を上げると、列車は新大阪駅のホームにゆっくりと滑り込みます。

車内の乗客も殆どが寝息を立てているようで、通路側で爆睡中の笑子の先の窓には、隣のホームに同じ車窓が並行して停まっていた。



ちょっとした居心地の悪さを感じて我に帰ると、列車はまだ新大阪に停車中のようです。



隣の列車が先発したのか、笑子の先の窓から狭いホームが見渡せます。

逆に玲子側の窓には、別の列車の車窓が連なって・・・急に違和感を感じて立ち上がった瞬間、前方から鋭い閃光と銃声がします。

車内が悲鳴で騒然とすると、濃いオレンジ色の煙が前方から押し寄せてきました。

腰のホルダーからリボルバーを抜いて構えた途端、背後から強い力で抱きかかえられ、デッキを引き摺られて車外に無理やり押し出されました。

他の二人も同じようにホームに引き出されています。

笑子が立ち上がって抵抗するところを、覆面の男が押さえつけ顔に白い布を被せます、同じように被せられた白い布からは、クロロホルムの強い匂いが・・・意識が遠のいて、男に倒れ掛かる刹那、新幹線のドアから噴き出るオレンジ色の煙に、忘れていた遠い昔の微かな記憶がフラッシュバックされて・・・。

どの位時間が経過したのか、見当が付きません。

ひどい頭痛で気が付くと、3人とも殺風景な小部屋の、窮屈なベットに寝かされていました。

周りを取り囲むのは、全て武骨な金属です。

鶯色に塗装された冷たい鋼材と、パイプ、無数の露出配線、天井には暗いLED照明3個と、壁に小さな顔鏡、窓はありません。

4台あるベットは2段式で、ビニルレザーのマットレスに、申し訳程度のシーツが掛かっていました。

人の排泄臭と、機械の潤滑油が焦げたような嫌な臭気が混在して、酷い空気です。

「―――何処なんですか此処、何だか臭い！」

笑子がそう云いながら頭を持ち上げると、上のベットのフレームに額をぶつけてしまいました。

ドアが開いて、野太い声で大柄な西洋人が入ってきました。



「目えが覚めたか？初めての人間はそこら中にでぼちんぶつけるさかい、ほら、ヘルメット3人分・・・。」

流暢な日本語です、多少関西訛りが在るようです。

「誰ですかあなた！」

蓉子が鋭く訊き返します。

髭面の口元に薄っすら笑みを浮かべて、「この船のキャプテンや、あご紐締めたらこっちにこんかい・・・。」

ベッドの小部屋を出ると、細い廊下の片側に大小の配管が縦横に走ります、壁が円筒形に湾曲して、天井に繋がっています。

ぎっしりと複雑な計器が密集する、かまぼこ型の大きな部屋に案内されました。

「さあ、ここがコントロールルームや、まあ楽にせんかい！」

8人のクルーが暗い部屋で、幻想的に輝く計器を覗き込んでいます。

話す言葉の意味はまったく分かりません。

「――まず、あんたらの置かれた状況を説明しとくわ、心配やろさかいな。或る依頼者から、新幹線から女を拉致して、この船で指定された港に連行する仕事を請け負った。請け負ったのは女一人だけやったが、拉致班が3人連れてきおった。若いの一人と、おばはん二人や。それにしても、あんたら二人よう似とるな・・・。」

無然とした表情で、蓉子と玲子が顔を見合います。

「この船は、ロシアの古い潜水艦や、軍からの払い下げでネットオークション出てたのを落札したんや。潜水艦は人がのる乗りも途中でいっちゃん足が遅い、目的の港までま〜だ時間掛かるさかい、あんたらここで好きにしいや・・・あんじょう大人しゅうしとったら、やかましこと云わんさかい。ただし、機械や計器に無暗に触れたらあかんで、鉄の壁の外は冷べたい海やさかいな。」

「それと、ワイが命令出したら、大急ぎで部屋に戻って静かにするんや、音出したらあかんで。あんたらの持ちもんはさっきの部屋にまとめて置いとるさかい。ただし、これは暫らく預かっとくでえ、上陸したら返したる。」

と云いながら、2丁のリボルバーを鍵のついたボックスの中に仕舞いました。

「ロシア語のようね、彼らの言葉・・・。」

「解るんですか蓉子さん・・・。」

「――一片言だけどね。」

ベッドの部屋に取って返した3人は、ドアをピツタリと閉めて、低い声で話し始めます。

「私を拉致するのが目的ね、ごめんね二人とも巻き込んで・・・。」

「とんでもありません、それが警護ですから。」

「蓉子さんを拉致する目的は？失礼ですが、匿名口座のマスターアカウントと云うのを  
お持ちですか？」

笑子が何時もの様に、自分の手帳を構えながら尋ねます。

「——無いわよそんなもの。」

あっさりと否定しました。

「京都府警で、あなたがそのアカウントを持ってる可能性があるから、狙われている旨、説明を受けたんですけど・・・？」

ベッドの下の段に腰を下ろしながら、玲子が呟きます。

「狙われているって、誰から？」

「マスターアカウントを取得したい勢力と、完全に抹消したい勢力からです。」

「どうして？」

永山の話の思い出しながら、笑子が続けます。

「マスターアカウントが存在すれば、漏洩した圧縮ホルダーを解凍して匿名口座のファイルロックを開錠するプログラムを作れる、匿名口座と名義人の素性を開示されるのが怖いから、プライベートバンカーと世界中の資産家は戦々恐々としているんでしょ？」腕を組んだ蓉子が首を傾げながら、「う～ん。ちょっと違うわねその話・・・。」

「――どう違うんですか？」

「世界中の資産家が、戦々恐々なんてしてないと思う。スイスには世界資金の1/3が預金されているけど、極めて合法的に管理されているの。タックスヘイブンを経由した脱税や、マネーロンダリングとは全く別の世界の話よ。匿名口座と名義人の素性がメディアに開示されても、多くの資産家にとって実害はないと思う、違法な預金をしている訳じゃないからね。違法な手段で取得された資金であっても、預金そのものが違法にはならないわ。貴方たちの云う“マスターアカウント”とやらが取りざたされているのは、もしそれが存在して手元に在るなら、スイスの匿名口座を包括した世界資金の動きに、何時でもアクセス出来るってことなの。そういう立場を外部にアピールしたい人々が居るってことよね。」

「意味が分からない・・・？」

「今まで、そんな立場の個人も団体も、世界中に誰一人存在しなかったからね。」

「だって、プライベートバンカーは・・・？」

「プライベートバンカーは、自分が経営パートナーの銀行口座しか管理しないわ、匿名口座どうしを横断して共通の作業を行ったのは、有史以来今回が初めてなの。それだけ独立性と秘匿性が高かった訳だけど、プライベートバンカーの中には、あの漏洩事件以来、匿名口座の秘匿性は消滅したと考える人が多いわ。」

「兎に角、世界の1/3の資金の動きがリアルタイムで把握できる訳だから、核兵器と同じなのよ、マスターアカウント持ってるって噂が広まれば、世界金融に与えるプレゼンスは違うものになるわ。」

「じゃ何で連中は、蓉子さん拉致したんですか？」

「一定期間拘束して、尋問を続ければ、たとえアカウントを取得できなかったとしても

、そういった立場を装うことが出来るじゃない。もしそんなものが実際あるなら、私の方が教えて欲しかったわ、何万もあるナンバーズアカウントを、いちいち解析してプログラム作ったのよ、2年も掛かったわ。」

「収集したナンバーズアカウントはどうされたんですか？」

「ネット上の無数のストレージに、分散して存在するわ。スタンドアロンの漏洩ホルダーがネットに接続される都度、フォーマットを掛けるためにね。」

「それを集めて、マスターアカウントを作るってことは？」

「無理ね、ひとつのストレージに存在するのは、ひとつのナンバーズアカウントの断片に過ぎないもの・・・最速のスーパーコンピュータでも100年掛かるわね。」

「私たち、どうなっちゃうんでしょう？拘束されて尋問されて、アカウントが解らないって拷問されるんでしょうか？」

「そんなことはないと思う、新幹線の一編成を大袈裟に破壊して、これ以上ないほど派手に拉致されたのよ、日本政府が絶対黙っちゃいないわ！」



ピッタリ安定して微動だにしなかった船体が、俄かに傾斜し始めました。

同時に船体の円筒方向を軸として、ゆったりとした動揺（ローリング）が始り、3人は部屋を出て、コントロールルームに向かいます。

船内の照明が赤色灯に替わり、空気に緊張感が増したようです。

「———どうして赤色なんですか？」

笑子が唐突にキャプテンに尋ねます。

「“晩” やさけ当たり前やないか、時間見てみい19時やでえ。」

「夜になると、照明赤くなるんですか？」

「あのな、世界中どの軍艦も、晩は赤色灯って決まっとるや！暗順応ゆうてな、外の暗いのには眼を早う慣らすためや。今から潜望鏡で海上の様子の確認やる、異常が無かったらシュノーケル航走始めるさかい、新鮮な空気腹いっぱい吸えるで。」

船尾からディーゼルエンジンの起動する低い機械音がして、ゆったりとしたローリングに、細かな振動が加わります。

船内の空気が入れ替わり、漂っていた汗と排泄物の臭気、機械油と燃料の匂いが一掃されます。

替わりにヨードをたっぷり含んだ潮の香りが、人々の肺を満たします。

キャプテンに勧められ、はしゃぎながら潜望鏡を覗いていた笑子の顔に、接眼フレームの跡が残って、浅黒い狸のようで滑稽です。

部屋に戻り、ベッドに体を横たえると、一気に疲労が全身を駆け巡ります。

それでも、冴え冴えとした意識に眠気は一切感じられません。

先行きの不安に心は押し潰されそうです、他の二人も同じ心境に違いありません。



暗鬱とした空気のもと、蓉子がポツリと呟きます。

「黒木さ・・・玲子さんって呼んでいい？今日の昼間なんだけど、尾道のお寺で玲子さん随分元気無かったじゃない、何かあったの？」

「そうですよ先輩、ずっとぼんやりしてましたよ。意識此処に在らずって感じで・・・。」

「プライベートな事だから・・・気にしないで下さい。」

「先輩と私の間に、プライベートも無いじゃないですか・・・私にも話せないんですか？」

「此処でこのままじっとしてたら気が滅入っちゃうでしょ、心配事なら力になれるかも知れないわ、話しちゃいなさいよ・・・誰にも云わないから。」

逡巡する玲子の顔を、優しく覗き込みながら、「あなたとどうして似ているのか、私も気になるの。プライベートな事って、そのあたりの話？」

「私の、出自に関する事です・・・。」

長い間を挟んで、玲子が訥々と語り始めます。

「笑ちゃんには、前に一度少し話したことがあるけど、私は子供の頃、東京の或る養護施設に居たのね。在京のプロテスタント教会が経営する民間の施設だったけど、小学校入学から高校を卒業するまで、その教会の牧師に育てられた。妻子のいない牧師さんだけど、優しくったわ。もうずっと前に亡くなっちゃったけどね。その育ての親が、亡くなる前にこれを渡してくれたの。」

そう言いながら、自分のバックの中の一冊奥から、フィルムでラミネートされた一枚のチケットを取り出します。

「お前は、東京駅の新幹線の回送列車の中で保護された、その時握りしめていたのが、この新幹線のチケットだって……。新尾道から東京までの、平成8年1月22日の乗車券……。牧師さんの出身地が、偶々尾道の近くだったのね、だから入所してきたお前のが気になった、だから施設を退所した後、引取って育てたんだって……。話してくれた。」

「でも、私にその当時の記憶が全くないの、小学校上がる前だから、仕方ないのかも知れないけど、本当の親がどんな人で、どうして尾道から新幹線に乗ったのか、全く覚えてないのよ。」

「記憶が無いのは、或る意味怖いことだわ。本当の親を知りたいと思う裏腹に、見たことのない自分の内面を曝け出すようで、怖かった。だから、今日まで尾道には一步も近寄らなかった、親について調べることもしなかったわ。」

二人ともひと言も発せず、息を呑んで聞き入っています。

相変わらず、ゆったりとしたローリングと、船尾からの振動が継続していました。

「分かった……。今度のことで、貴女たちに辛い思いさせてるわね、御免なさい。でも、もし玲子さんが尾道出身なら、私と何か関係があるのかも知れない……。スイスに帰れたら両親に訊いてみる。パパとママは毎年尾道に帰ってたし、顔も広いから何か分かるかも知れない。」

「それと蓉子さん、そのことで今日気が付いたことがあるの。笑ちゃんも訊いて――一駅で拉致されて、クロロホルムを嗅がされた時、新幹線のドアから煙が出てたじゃない、あの映像が頭から離れないの……。何だか気になってしょうが無い、きっと前に一度見たことの在る状況なんだと思う。」

「――子供の頃の記憶が、蘇りつつあるのかも知れないわね。」

「京都に帰れたら、私が調べます。その日の新幹線の記録を片っ端から……。」  
その時でした！大型トレーラーのエアブレーキを連続して解除するような、プシュープシューと云う空気音に続いて、ゴボゴボと海水が浸入する音、同時に船首に向かって床が急激に傾斜してきました。

ベッドの上の固定していない私物が、一斉に転げ落ちます。

狭い廊下を這うようにして、コントロールルームに向かいます。



赤色灯に照らされて、真っ赤な顔のキャプテンが、真剣な表情でクルーに指示を出しています。



「どうしたの！何があったの！」

笑子の甲高い叫び声が、船内に響き渡ります。

飛び出さんばかりに見開いた両目で、笑子を睨みつけた次の瞬間、唇の前に人差し指を立てながら押し殺した声で怒鳴ります。

「——でえかい声出すなこのどアホ！静かにさせい！しばいたろか？」

顰め面で周囲を見渡します。

「得体の知れん船から、追っ駆け回されとるんや。足が早うて逃げ切れんわ……。」

「日本の巡視船？」

「大人しゅう航走しとるのを、巡視船がいきなり機関銃で撃って来るか？冗談やないでえ……。」

「どうするの？」

「沈座してやり過ごす……ええか、これから暫らく息もすなよ！」

沈座とは海底に船を着座させて潜むことです。

「魚雷発射して追っ払えばいいじゃない——。」

「大アホかおのれ！ネットオークションで落札した船に、そないなもの附いてる訳がないやろ、ビリケンさんが臍で茶沸かすぞ！」

気が付くと、既にディーゼルエンジンの振動も、緩やかなローリングも停止して、船内は無動無音の状態です。

傾斜していた床がゆっくりと水平を取り戻し、微かな振動の後、完全な静寂が訪れました。

「沈座した……。」

キャプテンが耳元で囁きます。

コントロールルームの全員が、立ったまま微動だにしません。

一定の間隔の金属音が、少しづつ大きくなります。

「アクティブソナー……やっぱどっかの軍艦ちゃうか？」

金属音に続いて、雷鳴のような重低音が近付いて来ます。

「――爆雷や、みんな何ぞ掴まれ！」

外板を大槌で何度も叩くような衝撃が耳を劈き、船体が大きく動揺して足をすくわれます。

全員その場にしゃがみこみ、息を潜めます。

赤色灯の下、漂う空気に緊張が漲ります。

アクティブソナーの金属音が最大となって、その後ゆっくりと遠ざかります。

「諦めたかいな・・・？」

その瞬間でした！船尾がグワッと持ち上がったかと思うと、物凄い衝撃がキャビンを襲います、船首側のキャビネットに全員叩きつけられ、数人の頭から血が流れます。

蓋が開いた電気配線ボックスから、そこら中に火花が飛び散ります。

かまぼこ型の壁を這う無数の配管の、至る所から海水が吹き出し、コントロールルームの床は水浸しです。

キャプテンの指示のもと、クルーが大急ぎで配管のバルブを閉めて廻ります。

「チキショウ！最後っ屁かまされた！」

キャプテンが汚い言葉で呻きます。

焦げ臭い匂いと一緒に、薄っすらと白い煙が漂ってきます。

左へ傾いたまま、船体がゆっくり安定しました。

クルーに何か云われたキャプテンが、蒼い顔をして船尾に消えます。

「――機械室が、浸水したらしいわよ。」

怪我をしたスタッフの介抱をしながら、蓉子が呟きます。

アクティブソナーの金属音は既に遠く、最早ほとんど聞き取れません。

暫らくするとキャプテンが帰ってきました。

周りのクルーとロシア語で話した後、「船尾から浸水や、防水区画閉鎖したから暫らくこのまま動けへん。いま調べさせとるが、ブローがでけへんやったら、着底や。」

「着底って？」

「――船底が海底に付くことや！」

「さっきからずっと海底に付いてるじゃない？」

「――そら、沈座やろ！」

「――どう違うの？」

「解らんやっちなあ、ブローして浮上できるのが沈座、でけへんのが着底や！」

「浮上できないの！だったら沈没じゃない！どうすんのよう・・・。」

「――そやさかいさっきから何度も云っとるやろ！手に合わん娘やなあ・・・兎

に角、3人とも部屋に帰って大人しゅうしとってくれ。対策考えるよって、ええな。」

ベッドの部屋に押し込められて、かなりの時間が経ちます。

夜が明けたのか、部屋の照明は赤色灯からLEDの昼光色に切り替わっていました。

酸素や電気がどのくらい持つのか、全く見当が付きません、抗しきれない絶望感が3人を包みます。

「大丈夫よ・・・必ず助かるから。」

蓉子の言葉にも、根拠はありませんでした。

暫らくすると、部屋のドアをノックする音がします。

廊下へ出てみると、恐らくこの船の全クルーが、コントロールルームで整列していました。

キャプテンが改まった表情で、「あんたらにはえらい迷惑かけた、目的の港まで安全に連行することがでけへんようになった。船を捨てる、非常脱出を試みる、此処は海面下55mや、訓練受けてえへんあんたらの命を保証することもでけへん。せやから云うて、此処におっても酸素がのうなって死ぬだけや・・・しゃあない。」

脱出筒は、船首と船尾に一か所づつ、計2か所装備されています。

キャプテンに案内されて船首側のそれに移動します。

直径1.5m程の鉄の円筒が上に伸びており、側面に重厚な耐圧ハッチが開いていました。

見ている間にも次々とクルーが中に入り、ハッチを閉めて脱出していきます。

「ええか、簡単に説明するよって、よう聞いとけ。まず中に入ってハッチを閉める、ほいたら海水が入って来るさけ、ゆっくり呼吸して体を浮かせ。圧が掛かって外と同じになったら、上のハッチを開けるんや・・・一緒に行くクルーに続いて浮上しいや、くれぐれも云うとくが、慌てて急ぐなや、ゆっくり浮上するんやで。」

「ほら、これが**SEIE**（全身脱出装具）や、脱出中呼吸も出来るし、減圧症もある程度防げる、海面に出たら空気で膨らんで、ライフジャケットにもなるさかいな。」

そう云いながらオレンジ色の全身スーツを渡されます。

「脱出筒には3人まで入れる、ワイとここに居る副長とであんたらをサポートする。ワイはキャプテンやさかい一番最後になるが、あんたらどの順番で行く？」

スーツの装着を手伝いながら、キャプテンが確認します。

「笑ちゃん、玲子さん、副長と一緒に先に行って。キャプテンと直ぐ後を追うから・・・。」

「いえ！まだ警護中ですから、白河と一緒に先に行ってください、私がキャプテンと残ります。」

「―――何云ってるの、貴女たちカップルなんでしょ！こんな時は一緒じゃないと駄目じゃない！どうしてもって云うんなら、副長と一緒に先に行くわ。3人で後から上がってきて・・・それとキャプテン、耐水フェルトペンない？」

受け取ったフェルトペンで、カップルのスーツにでかでか書き込みます。“骨壺の表面、フーリエ変換”

「何ですか？これ・・・。」

「マスターアカウントよ、私が死んだら書き取ってスイスのパパに届けて。」

そう云うと、副長と共に脱出筒に入って、ハッチを閉めました。



クルーが残っていないか、船内を確認したキャプテンが戻ってくると、「なんや、あんたらカップルかいな・・・ほな、片方だけ死なす訳にもいかんなあ。」

ハッチを閉めて冷たい海水が入って来ると、「―――鼻つまんで、耳抜きしときや。鼓膜が破裂するでえ。」

思わず笑子を引き寄せ、スーツの上から抱きしめていました。

脱出筒が水で充填されると、キャプテンが操作して上のハッチを開放します。

ハッチの縁に掴まって体を支え、船の甲板に這い上がって上を見上げると、オレンジ色に輝く海面がすぐ近くに見えて、ゆっくりと立ち上がると目の高さに水面がきました。ライフジャケットが展開して水面に浮くと、直ぐ近くでポカンとした表情の蓉子と笑子が、スーツの中からこっちを見えています。

ゴムボートで回収されて水から上がり、周囲を見廻すと、広大な鉄骨の屋根の下に巨大なプール、水面下をよく見ると、さっきまで乗っていた潜水艦が、様々な装置に囲まれて固定されています。

頭上からのナトリウムランプが、水中の巨大な船体を明瞭に照らし出し、数名のダイバーが、廻りの装置を調整しているようです。

よく見ると、鉄骨のあちこちに足場が残り、天井パネルの設置が終わってない処もあって、施設全体まだ工事中のようです。

脱ぎかけたオレンジのスーツから、水を滴らせながら蓉子が近付いて来ます。

「笑ちゃん、玲子さん、貴女たちも承知してたことなの、これは！」

「いや違います！ミス・バルマー、彼女たちは何も知りません。役者でも何でも無い、ただの京都府警の刑事です。」

振り返ると、黒いコート姿の男数人が近付いて来ました。

「三浦副長官！」

笑子が大声を挙げます。

「内閣官房副長官の、三浦といいます。私が全てを計画して、スタッフを集め、実行し

ました。作戦行為の対象は、貴女方3名です。」

「何の為に！」

笑子が鋭く訊き返します。

「マスターアカウントです、それにしても骨壺の模様だとは気が付きませんでした、中は空港のCIQで充分確認させて頂いたんですがね・・・フーリエ変換だなんて、流石数学者だ。」

濡れたスーツを手荒く脱ぎ捨て、すっと男に近寄ると、上半身を一杯に振じって振り被り、広げた掌で思い切り男の頬をはり倒します。

護衛の男二人が、玲子に掴み掛ろうとするのを押し留め、「いいんだ！このくらい承知の上だ！」と頬を摩ります。

踵を返して立ち去ろうとするのを、水から上がった潜水艦のキャプテンが、「―――忘れもんや！」と云いながらビニル袋に入ったりボルバー2丁を投げてよこします。

三浦の方に振り返り、「これで2度目や！3度目はあらへんでえ、どてっ腹に風穴開けたるよって、覚悟しいや！」

玲子の激しい怒りは、女性らしい慎ましさをかなぐり捨て、関西弁の激しさを纏いながら、本心を素直に曝け出したようでした。



「此花区のユニバーサル・スタジオだ、聞いてないか？新年度から本物の潜水艦を使った、新しいアトラクションがオープンする。水中で様々な装置を使って、潜水艦の色々なシチュエーションを再現するそうだ。観客は実際に船内に入って様々な体験をする、君たちが行った非常脱出も、アトラクションのひとつらしい。」

関西空港から蓉子が帰国し、任務を終えた二人が、府警本部で再び刑事部長の永山と談話しています。

「三浦副長官は、竣工前の施設をまるまる借り上げて、役者を雇って君たちを迎え入れたらしい。」

「潜水艦のキャプテンが、関西訛りだったのは？」

「日本語が話せるロシア人の役者が、あの男しかいなかったそうだ、天王寺で生まれて、10代後半まで暮らしてたらしいから、コテコテの大阪人だ。」



「新幹線から、どうやって**USJ**まで連れて行かれたんですか？」

「広島から同行した広島県警の警官4名、実は警察庁外事情報部の職員だったようだ、昨日、本庁の友人から内々に連絡があった。新大阪に着く直前に、亜酸化窒素を使ったって教えてくれた。君達が食べた駅弁にも、何か細工をしていたかも知れない。」

「3人が昏睡した後、体調不良を装って、隣の回送車両に移し替えた。他の客から分からない様に、デッキにブルーシートを下げ、列車ドアの間に専用の橋を掛けて移したようだ。」

「じゃ、回送電車に乗っていたのも、皆役者さん？」

「そう、君たちを拉致した演出は、新大阪の先の鳥飼の車両基地で行われた、新大阪駅じゃあんなことは出来んからなあ・・・。」

「当然JR東海の協力も得ているし、芝居を見破られないように、最大限慎重を期したようだ。」

「今振り返ると、おかしい処は一杯ありましたわ・・・。」

「兎も角、新幹線で拉致され、何処かの海岸から沖合の潜水艦に移されて、連行される途中、国籍不明の軍艦に撃沈される。死に直面したミス・バルマーが、君たちにマスターアカウントを託すと云ったシナリオが、副長官の指揮の下、見事に実行された訳だ。」

」

「―――どうして私たちに託すって分かったのかしら？三浦副長官？」

笑子が首を傾げながら尋ねます。

「黒木とミス・バルマーとなら、実の姉妹以上に打ち解けるって信じてたんじゃないか、あのポートレートが送られてきたのも、東京の警察庁からだ。」

「私と、蓉子さんがそっくりだってことを知った時に、思いついた計画じゃないの……。」

「蓉子さんがフェルトペンで書いた“骨壺の表面、フーリエ変換”と云うのがよく解らないんですけど？」

「フーリエ変換というのは、音響解析や画像処理技術のひとつよ。複数の波形が混在する音響や画像を、周波数ごとに解析して、振幅のデジタルデータとして整理することが出来るわ。見せて貰ったガラスの骨壺に、綺麗な波模様がフロスト加工されていたじゃない、あの波形をフーリエ変換して得られたデジタルデータが、マスターアカウントじゃないかと思うの。」

「成田のCIQで、骨壺の詳細な写真を撮っているだろうから、日本政府は既にその“マスターアカウント”とやらを、取得したんだと思う。」

「政府は何故マスターアカウントが必要だったんですか？」

「スイスのプライベートバンカーと、日本の資産家との付き合いは永いからなあ。それに、じり貧状態の日本の国力を考えると、軍事力のアメリカ、生産力の中国に対して、金融の力で再び台頭したい思惑があるんじゃないのか？」

「でも蓉子さんが、日本政府がこんな大掛かりな芝居をして、人を騙して無理やりマスターアカウントを奪われたって、スイスで訴えたら、政府の立場も無くなるんじゃないですか？」

「証拠が無いからな、政府が認めなけりゃ誰も信じんよ。重要なのはマスターアカウントが日本に在って、日本政府が把握しているだろうって推測だ。」

「尾道の、蓉子さんちのお墓は、これから嚴重に監視されるでしょうね。もうすでに、骨壺だけ他に移されているかも知れない……。」

「最後に一つ、分からないことがあるのよ。蓉子さん、私たちがカップルだってどうして思ったのかしら？」

「昨日、伏見稻荷で先輩が用足しに行ってた時、蓉子さん云ってましたよ。最初に会った瞬間に分かったって……。女の感なんだそうですよ。」

「―――きっと、そんな香りがしたんだ。」

ティーポットから紅茶を注ぎながら、永山が呟きます。

「――嫌らしい、部長！」

蚕の社近くの、カップルのマンションです。

まだ、明けやらぬ冬の朝日に、二人の褥が紅く色付きはじめます。

「ねえ、玲子さん・・・蓉子さんを、ベッドで抱きたいと思ったことありません？」

「なに、笑ちゃんそんなこと・・・。」

「私、時々思うんですよ・・・東日本大震災で亡くなった私の双子の姉妹が、もし生きていたら、裸で抱きしめたいって。」

「―――ロープで縛りあげて、お尻の穴を責めるの？」

「そういうことじゃなくって！自分と容姿も、体温も、吐く息も、肌の感触も、全く同じ生身の体があったら、自分の自由にしてみたいと思いませんか？」

「思わないわよ・・・何だか気持ち悪い。」

「全裸の玲子さんを、抱きしめてみたいって・・・蓉子さん云ってましたよ。」

「あの人、スイス人だから・・・文化の違いじゃないの？」

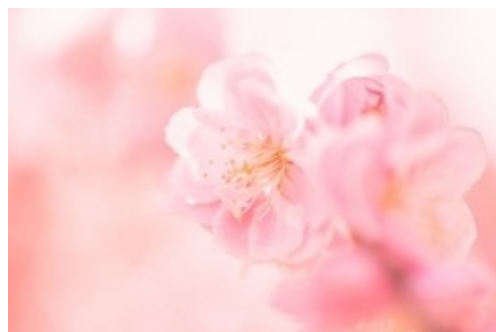
「そうじゃなくって、自分に素直なんじゃないですか？」

「知らないわよ・・・もう。」

そう云って、羽毛布団を巻いて向こうに寝返りをうちます。

「玲子さん、女性にもてるから・・・。」

振り返って元に戻ると、「私は、あなたを自由にできるから、いいのよ・・・。」と云いながら、笑子の上に覆いかぶさり、優しく唇をかさねます。



この3年後に、バーゼルの国際決済銀行は、スイスのプライベートバンカーの総意として、匿名口座の運用を終了するとの内容の会見を行います。

全世界の資産家にとって、寝耳に水の会見となりましたが、進歩的な多くの金融機関に於いては、ごく自然な推移と受け取られました。

その理由として、全世界的な、金融・通貨・証券に対する執着の低下、これは人々の生活・生命維持に関する経済の冗長性の確立、つまり資金が無ければ、自分で目的の対象を直接創ることも出来るという、人々の選択肢の多様性の確立から生ずるものです。

また、その国の平均的な生涯収入の何倍にも達する個人資産（活用されない資産が多い）の維持が、困難な社会環境に推移しつつあること（多くの国で、所謂“資産維持税”

が国税として適用され、更に相続・贈与に対しては、平均的生涯収入の2倍を上回る相続資産・受贈資産について、100%近い税率が適用されつつある。)が挙げられています。

何れにせよこの会見によって、三浦内閣官房副長官の任期中の成果として称賛される、日本の世界金融に対するプレゼンスは、3年でその効力を失うこととなりました。

玲子にとって、肉親の肌の感覚は、記憶する範囲で経験のない、未知の感触には違いありません。

一度だけでもその温もりを味わいたいと思う反面、自分のこれまでの人生で纏った肌の刺々しさが、容易に受け入れられるもので無いことも承知しています。

世界の何処かで生きている筈の御親との再会が、見果てぬ想いの岩塊となって、玲子の心胆に重く押し掛かっていました。

「平成8年1月22日の、新大阪駅の日誌を調べてみたんですが・・・お昼過ぎに変な事件があったらしいんです。」

刑事部屋の昼休みに、府警本部の向かいのレストランでカップルが食事をしています。

「停車中の東京行ひかりの中で、発煙筒が焚かれたって・・・車両3両に煙が充満して、大騒ぎになってお客さん全員降ろしたんだそうです。1時間遅れで発車したらしいんですけど、誰が発煙筒焚いたのか、分からず仕舞いだそうです。列車のドアからもくもく煙が上がったって書いてあるから、玲子さんこれを見たのかも知れませんよ！」

「その列車名は？」

「ひかり522号。」

「その時に先発して発車した列車は？」

「エート、古い時刻表によると・・・のぞみ128号東京行。」

「私のチケットは乗車券だから、列車名書いてないのよね・・・。」

と云いながら、ラミネートされた乗車券をバックから出します。

潜水艦から脱出した時も、これだけを肌着の中に忍ばせていました。

「さっき部長からメールがあって、二人の休暇申請下りたそうです。兎に角、一週間かけて、玲子さんの出自を調べてみましょう。」

「でも、刑事部も忙しいのに・・・何も私の為にこの時期休まなくたって・・・。」

「スイスの蓉子さんからも、いろいろ情報がメールされてきています。今しかありませんよ！さあ、重いお尻上げて・・・。」

―――おわり。

物語は全てフィクションであり、実在する人物・団体・施設等と一切の拘わりはありません。  
悪しからずご了承ください。

尚、添付した写真は、Photock 及び PhotoAC から転載させて頂きました。



御親の記憶は儚くも・・・ただ逢いたくて。

<http://p.booklog.jp/book/119511>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/119511>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト